

キャンパス・コラム

「21世紀をめざして」とか「21世紀を考える」などと言った表題が、ここかしこに見られるこの頃である。おおかたは、内容は何であれ、大袈裟に時間の区切りを表現することによって生まれる刺激の効用を頼む姿勢でしかないようだ。

連続の時間の流れに区切りを入れることは、何時でも何処でも行われてきていて、我々はそれを生活や行事の目安にしているわけである。年末年始は当然として、四月に始まり三月に終わる学校教育の区切りは、日本ではおおやけの約束事であり、「試験が終わったら・・・」、「四月になれば・・・」など予定や希望も確と定められた約束事を先ずの手掛かりにする。

「夏休みまでに〇〇を仕上げよう」と決意してみるのには、夏までの時間の流れを意識したうえでのことであり、「仕上げ」てから始まる個人にとっての特別な時間と季節への期待も含ま

れている。おおやけの約束事のほかに自然の約束事としての四季があり、これも区切りであろう。我々の体感する季節の区切り目は獺とした数日以上幅を持っているが、確実にその季節はやって来て、時は流れる。何かが変わる。その何かの変化を区切りとする人もいるだろう。そんな時の流れを意識の内で固着させることも人はできる。

今年も五月になった。五月に区切りを持つ人もいて、いろいろな区切りもあるだろう。与謝野晶子に「さつき・・・」で始まり「きみもコクリコわれもコクリコ」で終わる短歌がある。昔から好きなのだが、何年か前から高名な小説家がよく取り上げるので、ここに書くには面映いことになってしまった。

晶子は陰暦五月の稲を植える月をフランスへ持って行ったわけである。

広報委員 榊原 剛（理工学部教授）

就職協定が廃止されて、今年で3年目。最近では新学年に入ると、校内で4年生をめぐり見なくなつた。先輩たちが就職活動に忙しく飛び回っている姿が目につく。大学4年制が事実上の「3年制」になつてしまった。よりよい人材を1日で早く採ろうという企業と、これに振り回される学生。4年生になつたとたん、運良く就職先が決まつてしまつと、残つた時間を勉強に当てようとしても、もう身が入るはずがない。以前、社会の第一線で活躍する女性クリエーターたちの共通点について、書かれたものを読んで気づいたことがある。それは彼女たちが持つ好奇心と観察力である。いずれも私たちは日頃、その必要性に気づかないが、彼女たちは、その気を働かせることによつて感性を育てているのだ。これは案外、机上の勉強以上に必要だと思ふ。私は好奇心を強く持ち、自分の将来を考え、そのためにいま、何をしておくべきかを急いで考えよう。今春から、男女雇用機会均等法も改正された。就職チャンスも、そんなところにあるのかも知れない。（白瀧 ちえみ）

編集後記

Hakomon
ちゅうおう

'99・5月号（第148号）

1999年（平成11年）5月1日発行

発行 中央大学広報委員会

〒192-0393 東京都八王子市東中野742-1

〈編集担当〉 広報部広報課 ☎0426-74-2146

印刷 泰成印刷株式会社

〒130-0026 東京都墨田区両国3-1-12

電話 03-3631-8141